

[書評]

神奈川大学人文学研究所編 御茶の水書房

『世界から見た日本文化——多文化共生社会の構築のために——』

駒 走 昭 二 (神奈川大学)

ある集団に属するものにとって、その集団が所有する「文化」は、単なる日常に過ぎず、それは、時間・空間的にその集団に属さない人々から注視されることによって、初めて意味づけられる。従って、「日本文化」なるものも、今、日本に生きる私たちの問題でありながら、私たちだけの問題ではない。

本書は、その点を十分に意識して企画された、同題の国際シンポジウム・記念講演の内容をもとに編まれた論文集である。

前半は、国際シンポジウムでの三人の報告である。それらは、「日本文化」という大きな共通テーマこそあるものの、それぞれの著者が分析の手段として用いている材料、依って立つ理論、視座はさまざまである。

まず、メアリー・ナイトン「[「パルタイ」から『スミヤキストQの冒険』へ」は、1960年代の初年と最終年に発表された倉橋由美子作品を採り上げ、文学解釈を施すことにより、また、それらが巻き起こした論争、さらには両作品の質的変遷に注目することによって、ポスト占領下の日本の近代化の動向を浮き彫りにする。そこでは、「特殊」と「普遍」、「部分」と「全体」という問題を扱うために、当時の建築界の革命的な動きであるメタボリズムとの関連づけがなされ、興味をひく。

次に、王勇「坐る仏と立つ神」は、「坐る」「立つ」という動作とそれによって生じる視点の違いを東洋と西洋の文化的特性に関連づけ、そこから日本文化の特徴を見定めようとする。それは、身体論的アプローチによる日本文化認識の可能性を示すものである。後の質疑応答でも明らかにされるように、著者の着眼点が、単なる東洋と西洋という二項対立ではなく、文化の流通を視野に入れた文化の広がりにあることも見逃してはなるまい。

三編目のシュテフィ・リヒター「[「実体」としての日本か「クール」な日本か」は、これまでの「日本文化」研究をカルチュラル・スタディーズの手法に照らし合わせ、両者が生産的に結びついていない問題点を鋭く指摘する。また、東アジアにおける歴史修正主義を、単なる地域的な問題としてではなく、グローバルな視点から眺め、それに対するドイツでの取り組みを希望的に論じる。全体を通して、文化研究のあり方自体について述べた啓発的な内容となっている。

なお、この上記三編については、シンポジウムでの質疑応答・全体討論の内容も、コメンテーター鈴木彰による報告という形で紹介されており、各論文の理解を助ける。活動の拠点・分野のそれぞれ異なる論者たちがそれぞれの視点から切り込んだ日本文化と日本文化研究であるが、この三編を通して、読者は、鈴木のように「文化を複眼的に問い続けることの大切さ」を感じ取るべきであろう。

後半は、そのほとんどが記念講演の内容に基づいたものであるが、まずは、川田順造「世界の中の日本文化を考える」である。川田は、20世紀初頭の同じ年に起こった二つの出来事、すなわち日露戦争開戦とオペラ『蝶々夫人』の初演に注目し、当時の新聞記事や風刺絵も用いながら、「日本文化」は、決して固定的に捉えられるものではなく、変動する歴史的条件の中で意味づけるべきであることを明快に説く。日本と世界が、同時代においても、片や、『蝶々夫人』のように、「観念的な世界で幾重にも屈折して揺れ動いて」交わり、片や、「観念の入り込む余地のない、この上なく即物的な戦争という形」で交わっていた事実の指摘は感慨深い。

ドミトリ・ラゴージン「ロシアにおける日本文学」では、ロシアでの日本文学の受容の仕方の変遷と現状が紹介される。例えば、村上春樹ブームや俳句・連歌の盛り上がりなどである。外国の文学を翻訳・分析する作業自体が自己認識の有効な手段になりうるという、異文化導入に対する著者の主張も注目に値する。また、当論考については、コメンテーター報告として中本信幸が、ロシアと日本との歴史的な関わり、現在の日本語教育の隆盛などについて補足説明を行っている。

ヴァチスラフ・フセヴォロドヴィチ・イワノフ「ロシア人研究者の見た日本の仏教」は、日本仏教にいち早く着目して研究を行ったオットン・オットノヴィチ・ローゼンベルグについての紹介である。彼の体験重視の研究スタイルと彼が世界的な仏教研究にもたらした功績が説明される。100年ほど前に活躍したこのロシアの仏教研究者が、日本の仏教研究を足がかりにして、インド・中国・日本という地理的な伝播と通時的展開の関連性に気づき、初期仏教の体系再構築を可能にしたことは、文化研究のあり方に関して、本書の他の論考とも通じるところがある。

ドナルド・キーン「世界の中の日本文学」は、日本文学が世界とどのようにに関わり、位置づけられてきたかを通時的に概観する。また、日本特有の文学ジャンルである日記の伝統にも触れ、その文学的価値を高く評価し、現代の日本社会にもその認識を求める。戦時中、日本兵が戦場に捨てていった日記の解読を任務として課された経験を持つ著者の主張は説得力を持ち、貴重な提言として受け止められるべきであろう。

近年、日本国内において、日本文化の再評価・発信という言葉が声高に叫ばれている。その動き自体はグローバル化からの逆行でもあり、順行でもあろう。しかし、それらが無自覚な積極性をもって、内側からのみ一方的に行われれば、右傾化の誹りを免れないであろう。また、それらを国際社会における地位向上のための戦術として利用することにも慎重でありたい。現状がどうであれ、本来、文化は、力の論理とは無関係であるべきだからである。

通信・交通機関が目覚ましく発達した今日では、躍起にならなくても、リアルな「日本文化」は自ずと世界に発信される。しかし、そのような時代においても、それを世界の人々がどのように意味づけるのか、その意味づけの背景には何があるのか、その意味づけが日本内部での自己評価とどのように一致し、また異なるのかは、常に問われ続けなければなるまい。

すべては、「日本文化」を常に動的なものとして捉え、尚かつ多角的に分析することによって始まる。そうすることが、「日本文化」の健全な認識へとつながるはずである。本書は、そのための手がかりを示唆してくれている。